
バカと武器と召喚獣

タイラント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと武器と召喚獣

【Nコード】

N0258Z

【作者名】

タイラント

【あらすじ】

オリ主はのんびり屋だが、武器を扱いは上手いが細かい作業は苦手だ。あることが切っ掛けでFクラスになってしまった。これからどうなるのかな？

のんびり少年（前書き）

初小説です。文字や表現など間違えているかもしれません。間違えていたら「ここ間違えている」と教えてください。

主人公の名前は、三話まで決めます。

のんびり少年

春、ここ文月学園^{ふみづき}も春、そこに遅刻ギリギリなのに普通に歩いてくる青年がおった。

そして、校門の前で一人の男が立っていた。

鉄人「お前は、急ごうとは思わないのか？」

??? 「んっ? ああゝ：鉄人かゝ：」

鉄人「鉄人じゃない、西村先生と呼べ」

??? 「んで、何ですか? 西村先生」

すると封筒を渡された。

鉄人「振り分け試験の結果だ。」

??? 「渡さなくても、俺が何処だか、わかりますよ。」

鉄人「一応渡すことになっているかな。全くお前は、なぜ振り分け試験日に休むんだ。」

お前ならBやCに行けたはずだろうに」

??? 「まっ、気にしないでください。」

鉄人「全くお前は、一度補習を受ける必要があるな。まあいい、早く行けもうすぐで、チャイムがなるぞ」

??? 「んじゃ、そういうことで」

と言いながら教室に向かった。

廊下を歩きながら封筒を開け中にある紙を見てこう言った。

??? 「やっぱりFクラスか」

Fクラスの住人？ あっ！間違えた。 クラスメイト（前書き）

今回もあやふやだな～

Fクラスの住人？ あっ！間違えた。 クラスメイト

俺は、A、B、C、D、Eクラスの教室を通って思った。

??? 「ふーん、格差社会てな感じだな……」

実は、俺は1年の2月頃に転校してきて学校のことは全然分からな
いし、友達は、少ない

だが、この学校には、面白いシステムがある。それは、試験召喚獣
システムと言う。

3月の中旬に俺は、召喚獣の扱いを先生に許可をもらい、一応慣れ
させてもらった。

今俺は、Fクラスのドアの前にいる。

??? 「ふーん、ここがFクラスかあ」

E、Fの差が激しいなあ、一気にぼろくなったなあ。」

あんまり気にしないようにしよう。

ドアを開けると男ばかり、まっ友達作るチャンスかもしれな
いけど。

??? 「先生おはようございます。」

福原先生「おはようございます。席は、自由なので好きな所へ
どうぞ。」

??? 「わかりました。」

俺は、窓側の席についた。(ちゃぶ台と座布団)
そのあとにチャイムが鳴って、ちよつとした後に、誰が入ってきた。

明久「ここがFクラスの教室!？」

これが格差社会で、奴か…」

福原先生「吉井君、早く席についてください。」

明久「はあゝ(ー。ー) 3 んで、僕の席は、どこですか？」

福原先生「好きな席へどうぞ。」

明久「席も決まってるのー!!!!!!」

そう言いながらはって来た奴は席についた。

明久「!! 先生、僕の座布団、綿が入って無いんですけど…」

福原先生「我慢してください。」

明久「先生、すきま風入ってるんですけど…」

福原先生「我慢してください。」

バキ!!

明久「先生、ちゃぶ台の足が折れたんですけど…」

福原先生「我慢s [明久「無理だよ!!」]」

福原先生「はっはっはっ、冗談ですよ、これで直してください」

そう言いながら木工ボンドを出した。

なんだこのやり取りと思いながら先生が、自己紹介し始めた。

福原先生「えー、私が、Fクラス担任福原です。皆さん、よろしく
お願いします。では、廊下側の人から自己紹介をお願いします。」

秀吉「木下^{きのした} 秀吉^{ひでよし}じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年よろしく
頼むぞい」

女見てーな奴だな。

ムツツリーニ「……土屋^{つちやこうた}康太 趣味は盗tY、何もない 特技は、
盗S、何もない…」

アイツ絶対になんか隠してる。

美波「うちの名前は島田^{しまだ}美波^{みなみ}です。ドイツ育ちで、日本語は、話せ
ますけど読み書きは、苦手です。 趣味は吉井をなぐることです。
はろはろ、吉井、今年もよろしくね」

おいおい吉井と言い奴がびびっているぞ。

明久「えーっと吉井^{よしいあきひさ}明久です。

気軽に、「ダーリン」って呼んでくださいね。」

Fクラスみんな「ダーリン!!」

わっかたことがある吉井とか言う奴はバカだ。
と思いつつ自分の番だ。

??? 「俺の名前は……………」

Fクラスの住人？ あっ！間違えた。 クラスメイト（後書き）

次回まで主人公の名前を決めないといけなく
＋キャラ紹介しないと

それに終わりがちよつとまいいや

自己紹介するぜ、俺の名前は……（前書き）

前書き 読んでる方様ありがとうございます。

10人位しか来ないかと思っていましたが50人以上の人が読んでくれています。

読んでくれ方様、本当にありがとうございます

自己紹介するぜ、俺の名前は……

??? 「自分の名前は、武久^{むく} 剛史^{つよし}だ。
今年い「ガラ」ん!？」

姫路「ハア、ハア、あの遅れてすいません。」

俺の自己紹介の途中でドアを開けて女子が入ってきた。

福原先生「丁度、自己紹介をしていた所なのであなたもお願いします。」

剛史（あれ？ 俺は？）

姫路「あの 姫路^{ひめじ} 瑞希^{みずき}といえます
よろしくお願いします……」

すると周りがざわめきだした。

FクラスA「なんで姫路さんがここに!？」

FクラスB「確か姫路って入学の最初のテストから上位の一桁以内
じゃないか?……あと可愛い」

剛史「ふーん、そうなんだ。」

俺は盗み聴きし事情がわかった。
でもなぜ、学年上位がここにいるんだ?と思った。

FクラスG「あのー質問なぜここにいるの？」

姫路「そ、その…試験中に高熱をだしてしまいました…」

FクラスZ「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

FクラスF「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

FクラスA「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

FクラスB「黙れ1人っ子」

FクラスH「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

FクラスW「今年一番の大嘘をありがとう」

はあー一人だけじゃないここにいる全員バカだ。
でも、試験中に高熱を出すとは運が悪いな。

福原先生「えーと…姫路さん好きな席へどうぞ」

姫路「はい、わかりました。」

そう言いつた後の席についた。

そして、俺は立ち。

剛史「あの…すいません、自己紹介し直してもいいですか？」

福原先生「えっ、そうですか、それではどう？」

「バキ、ばらばら」

何もしてないのに壊れてしまった。

俺は、思った。

剛史（ここの設備は、あかんな）

福原先生「工具を取ってくるんで、みなさん自習しててください。」

剛史「えっ！　ちょっと俺の自己紹介は！！」

ばたん

剛史（あーあ、行っちゃった。

なんか変なことになっちゃったな）。

こんなことならちゃんと振り分け試験をちゃんとやっとならばよかった……）

と思いつつ俺は、後悔しながら初日が終わった。

自己紹介するぜ、俺の名前は……（後書き）

次回は、武久剛史のキャラ紹介したいと思います。
。

キャラ紹介

名前…武久 剛史^{むく つよし}

身長体重…172? 66?

性格…のんびり屋、闘いになると熱くなる。

体格…ちよつと筋肉があり力持ち

髪…色は黒 少しだけ髪がボサボサ

特技…武器を扱うこと（銃の命中率は、75/100）、水泳

不特技…料理（餃子は作れる）、走る、細かい作業

教科…得意な教科

数学、化学、地

理 （点数は、500以上）

不得意の教科

国語、古典、世

界史、日本史、社会 （150点位）

他の教科は250〜450点

好きな物…武器 （ジャンルは、問わず）、蟹と餃子 （目がな
い）

召喚獣…武器の名前を呼べば出れくる。私服みたいな服を身に付け
てる。

腕輪の能力…武器を融合させることができる。 （消費点数…10
点）

過去…中学二年生の時まで、ものすごく短期で、一発叩いただけで、
相手をぼろぼろしてしまう。そのお陰で暴君と呼ばれていた。中学
三年の時に短期を解消したが、友達が少なく一匹狼状態になってし
まい辛い過去がある。

キャラ紹介（後書き）

よかったら感想もお願いします。

戦争の理由は、自分の利益のため……かな？（前書き）

これからどんどん小説を書いていきたいと思っています。

戦争の理由は、自分の利益のため……………かな？

次の日

俺は、教室にいた。

朝日の太陽を浴びながら俺は、短剣の手入れをしていた。

だが急にトイレがしたくなって教室を出てトイレをすまして教室の近くまで来た時、二人の男子が何か話していた。

俺は、立ち止り二人の話を聞いてみようと思った。

坂本「んで、なんのようだ？」

明久「僕は、思うんだよ。」

学校というのは社会の縮図だろ、こんな差別のあるような暮す格差があるべきじゃない、でも最下位の僕たちが何を言っても負け犬の遠吠えにしかならないから先制堂々勝負を挑んで実力と発言権得た故で、この疑問をこの世の中に：「坂本「つまりお前は、姫路のためにクラスの設備を良くしたいわけだ。」」 恥ずかしいから遠まわしに言っているのになんで直球でいい直すんだよ！！！」

坂本「いいだろう実は、俺も仕掛けてみたいと思っていたんだ。」

明久「えっ？ 雄二も」

坂本「ああ…世の中、学力だけが全てじゃないって、証明してみたくな。」

それに勝算はある。」

明久「！！」

坂本「やってみるか？ 明久」

明久「ああ、やろう試験召喚戦争を」

剛史「へえ、試験戦争をやるんだ。」

明久・坂本「！！」

俺は、しゃべると二人は、こっち気付き振り向いた。

剛史「話は全部聞いた。高熱を出した女子のために試験戦争をやるんだろ？」

明久「あなたは・・・誰だっけ？」

剛史「昨日、自己紹介したのに……間合いい、俺の名前は、武久剛史だ。よろしく」

坂本「坂本雄二だ。よろしく」

明久「僕の名前は、吉井明久だよ。よろしく」

剛史「よろしくな、雄二、明久」

坂本「それじゃ、教室に入るぞ」

剛史「わかった。」

教室に入り坂本は、黒板の前に立ち教壇を叩き注目させる。
そして雄二は……

坂本「みんな聞いてくれ、Fクラスの代表として提案がある。俺達Fクラスは、試験召喚戦争を仕掛けようと思う。」

坂本がそう言うときみんながざわめきだした。

あれ？坂本でFクラスの代表だったのか？

秀吉「なんじゃと！！！！」

美波「試験召喚戦争でまさか…」

坂本「ああそのまさかだ、みんなこのおんぼろ教室に不満は、ないか？」

全Fクラス「おおアリだー！！！！！！！！」

剛史（みんなやっぱり不満があったんだ。）

坂本「だが、試験戦争にさえ勝利さえすれば、Aクラスの豪快な設備を手に入れることが出来るんだ。」

全Fクラス「おおー！！！！！！！！」

坂本「われわれは、最下位だ。！！！！」

全Fクラス「おお！！！！！！」

坂本「学園のカスだ！！！！」

全Fクラス「おお！！！！」

坂本「誰からも見向きされない。!!!!」

全Fクラス「おお!!」

坂本「これ以上、下のないクズの集まりだ。!!!!」

全Fクラス「おお!!」

坂本「つまりそれは、失うものは何もないってことだ。」

全Fクラス「!!」

剛史（すごいこと言っているけど中身はものすごい紙のようにぺらぺらだよ。）

坂本「ならだめもとでやってみようじゃないか!!
それにおれは、こいつらがっている。」

すると坂本は、姫路、木下、土屋、明久、そして俺にも指名した。

坂本「おい康太、いつまで姫路のスカート覗いてるんだ。」

姫路の方を見ると土屋が必死に覗こうとしていた。

ムツツリーニ「……………!!」

姫路「はっ はわッ!!」

土屋はものすごい否定している。

それに気がついた。姫路は、慌てていた。

坂本「土屋康太　こいつがあ有名なムツツリーニだ。」

FクラスT「馬鹿な：奴がそうだというのか？」

FクラスM「みろ！まだ証拠を隠しているぞ：」

FクラスL「ああ、ムツツリの恥じない姿だ：」

剛史（何かあると思ったらそう言うことか：）

坂本「姫路のことは、皆その実力は知っているはずだ。」

坂本は、みんなのざわめきを気にせず話を続ける。

姫路「えっ？わ　私もですか？」

坂本「ああ　ウチの主戦力だ。期待している。」

FクラスP「そうた！　俺たちには、姫路さんがいる！」

FクラスQ「彼女ならAクラスに引けを取らない。」

FクラスA「ああ　彼女さえいれば何もいらぬ」

剛史（体調管理以外はすごいんだ、でも気のせいだろうかラブコールを言ってるやつがいるんじゃないのか？）

坂本「それに剛史がいる」

坂本の話は、続き俺に振ってきた。

剛史「えっ？　ん！俺？」

坂本「ああ、そうだ。こいつは、試験を受けていればこいつは、BかCクラスになっていた。」

するとみんながざわめきだした。

FクラスX「すごい、そんな奴がここにいたとは！！」

FクラスF「でもなんでいるんだ？」

FクラスL「どうせ体調不良だろ。」

FクラスR「つーか誰？」

だんだんFクラスの空気が「すごいじゃないか」の空気から疑問による空気変わってしまった。

FクラスV「質問なぜここにいるの？」

剛史「それは……別にどうでもいいじゃか」

坂本「こいつは、副戦力として頑張ってもらおう。」

剛史「まっ、これからよしくな」

俺は、そう言って坂本は、話を続ける。

坂本「それに木下秀吉だっている。」

秀吉「ワシもか？」

FクラスA「演劇部のホープ！」

FクラスS「ああアイツ確かAクラスに双子の姉が……」

FクラスN「Aクラスの木下優子だっけ？」

剛史（ふうん、双子の姉がいるんだ。しかもAクラス）

坂本「当然 俺も全力を尽くす。さらに吉井明久だっている。」

明久「え？ ん？」

全Fクラス「？」

Fクラスの空気が一気に静まった。

坂本「ここにいる吉井明久はなんと“観察処分者”だ。」

するとFクラスは、またざわめきだした。

Fクラス「アイツが観察処分者だと」

Fクラス「このクラスに！？」

Fクラス「スゲー初めてみた。」

Fクラス「絶望した。」

明久「いやぁ…、それほどでも」

剛史「いや半数以上が悪口に聞こえるんだけど…。」

クラスから絶望の声があちらこちらから聞こえるさなか

姫路「はい」

と姫路が手を挙げた

坂本「なんだ姫路？」

姫路「観察処分者てすごいですか？」

坂本「ああ 誰にでもなれるわけではない、成績が悪く。学習意欲に欠けるに問題児に与えられる特別なことだ。」

秀吉「バカの代名詞と言われておる。」

美波「まったく何にも役に立たない人のことよ。」

姫路「へー、本当にすごいですね。」

明久「だー！穴があったら入りたい」

坂本「試召戦争に勝利すればこんなおんぼろ教室とは、おさらばだ。どうだ！みんなやってみないか？」

全Fクラス「おおーーーーー!!!!!!」

みんなが希望を持ち一致団結し始めた。

坂本「まず手始めにEクラスを倒す。

明久Fクラスの使者としてEクラスに宣戦布告してこい」

明久「え！僕？普通：下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うんだよね？」

坂本「それは、映画や小説の中の話だ。〔明久「えっでも…」〕騙されたと思って行ってこい。」

明久「うん！」

そう、言って明久が出て行った。

夕方、みんながいなくなって坂本と俺だけが残って明久が帰ってきた。

明久「騙されたよー！!!!!!!」

坂本「やはりな」

剛史「まっそうなるだろうな。」

明久「二人とも予想してたのかよ!!!!!!」

坂本「それくらい予想できなくては、代表としては、務まらない」

剛史「全くだ。」

明久「少しは悪じいれろよ」

坂本「これでもう後戻りはできないぞ明久、覚悟はいいか？」

明久「え?!」

坂本「お前の望みなんだろう？」

剛史「あの子のためにだろ？」

明久「ああいつでも来い」

これで俺達は明日にEクラスと試召戦争をすることになった。

戦争の理由は、自分の利益のため……かな？（後書き）

今回は、長くなってしまった。

次回は、Eクラスと試召戦争をやります。（予定）

作戦は一刻を争ってる。みたいだな…（前書き）

読んでくれた人が200人超えました。

読んでくれた方様大変ありがとうございます。まさかここまで読んでくださるとは、思ってみなかったです。

作戦は一刻を争ってる。みたいだな…

次の日の朝

教室に入るとみんながざわざわしていた。無理もないだろ試召戦争があるのだから、黒板の方を見てみると坂本が今日の作戦のために黒板になんか書いていた。俺は、席に着き眠りについた。思ったから坂本が、作戦の説明をし始めた。

坂本「みんな聞いてくれ今日はEクラスとの対戦だ。そして先頭の立会人は長谷川先生を使うちょうど5限目でEクラスに向かう所を確保する。」

明久「長谷川先生と言ったら科目は数学」

島田「数学ならウチが得意よ。」

坂本「その島田の得意な数学で主力にして戦う」

剛史「おい、俺と姫路は前のテストを受けてないから点数は0だぞ。」

坂本「ああ、そうだ。二人は前の試験で姫路は、途中退席し剛史は学校に来てなかったからだから回復試験を受けてもらう。そうすれば姫路も剛史も途中から参戦できる。でも剛史今回は戦いは、参加しないでくれ。」

剛史「? なん ведь。」

坂本「説明は後です。それから姫路。」

姫路「はい？」

坂本「頑張ってくれ」

姫路「はい！」

剛史（どうやら作戦の説明は終わっ！！！！）

俺は何かに気づき廊下側の方を見てみると誰かが歩いていった。

俺は気にせず。一応もしものために作戦のために勉強をした

そして5限目になって長谷川先生が歩いてきた。そして先生を確保し

坂本「開戦だ総員戦闘開始！！」と回復試験を受けている。補給室にいる俺の所まで聞こえ戦闘が始らしい。

高橋先生「では、始めてください。」

俺は、回復試験を始めた。数学なんて俺にしちゃ簡単な科目。しばらくして、島田だが来た。

島田「回復試験を受けます。」

高橋先生「科目は、何にします。」

島田「数学で」

島田も来て回復試験を受けた。でもしばらくして、島田は何かに悩

んでいるみたいだな」

そして、回復試験が終わり俺と姫路と島田は、Fクラスを向かって
いた。

Fクラスの近くまで来たが、廊下には、誰にもいない。と言うこと
は……

剛史「姫路、Eクラスの連中は、Fクラスにいるはずだ。一気に相
手倒すんだ!!」

姫路「はい!わかりました!!」

Fクラスに到着し扉をあけるとEクラスの連中がいた。

姫路「待ってください!! 姫路瑞希受けます。試験召喚獣召喚」
サモン

そしてEクラスをどんどん倒して最後にEクラスの代表だけになっ
てしまった。

EクラスU「なんだあの点数は!?!」

EクラスA「Aクラス並の攻撃力だぞ!!」

EクラスE「なんでこのFクラスに!?!」

Eクラスの連中は驚きを隠せないようだ。

坂本「やっと来たか」

明久「姫路さん!!」

中林「姫路瑞希でっもしかしてあなた…」

どうやら代表も驚いているみたいだ。

島田「吉井」

明久「島田さん？」

島田「この二人やっぱりすごいわ！」

坂本「さすがAクラス候補だけでもあるな。」

明久「あれが姫路さんの成績？」

剛史「時間内、問題数無制限だからなくここの学校は」

明久「それじゃ作戦で言うのは？」

坂本「ただの時間稼ぎだな」

中林「くっ、Fクラスにそんな人がいるなんて聞いてないわよ。」

姫路「行きます。ごめんなさい。」

姫路はそう言って代表を倒した。ということはFクラスが勝ったてことだ。

みんなは喜び浮かれていた。

明久「やったーすごいよ姫路さんこれも姫路さんのおかげだよ。」

姫路「そんな、ありがとうございます。」

明久「これでFクラスとEクラスとの設備は交換わけだね。少しだけいい環境になるよ。」

坂本「いいや。設備は交換しない」

剛史「ん？」

明久「え？」

坂本「設備はいままでのままだ。どうだいい提案だろ？Eクラス代表さん」

中林「そんな！？なんで？」

明久「そうだよ雄二せっかく勝ったのになんで？」

坂本「俺達は、あくまでAクラスの設備だ。他の設備は教室はどうでもいい。そのかわり条件がある。」

中林「わかったわ。」

そして学校も終わり俺は、坂本に聞きたいことがあり探して靴箱に行くと雄二と明久を見つけた。

剛史「おっいた。おい雄二」

坂本「ん？なんだ剛史か」

剛史「俺は、なんで今回の戦いには参加はできなかったんだ。召喚

獣の扱いは、それなりに慣れてないかもしれないけど。」

坂本「確かにそれもあるかもしれないけど、もう一つある。それは次の戦いにためだ。んじゃ、また明日な」

そう言って坂本は帰っていた。

剛史（もしかして…間合いか）

そう思って、俺も帰っていた。

作戦は一刻を争ってる。みたいだな…（後書き）

次回は、まだ未定です。

これからこの小説はどう行くんでしょうね。

自分の部屋は注意にするべし!! (前書き)

今回は、オリ主のちょっとしたプライベートです。

自分の部屋は注意にするべし!!

俺は学校から家に帰ってきた。

かばんを置いてソファに寝ころんで、テレビを観てる

剛史（はあく…戦争に勝ったのはいいが雄二は何で設備の交換をしなかったんだろう？まっいっか考えるのも面倒だ……………
…手入れでもするか。）

そう思った俺は、自分の部屋に行きドアに開け入ると武器が正面に15個、左右に10個ずつあった。

正面と左にある武器を1個ずつ取って手入れを始めた。手入れをしているのは剣と弓だ。そして手入れをしているうちにふと思った

剛史（剣と弓一つにしたらどうなるんだろうか？）

そう思いながら手入れが終わり、風呂に入って、ソファでまたテレビを見ようとしたら電話が鳴り、しょうがなくてた。

剛史「はい、もしもし」

???「よっ！ お久しぶり!!」

剛史「なんだ〜お前か何かよう？」

???「いや〜新しい学校がつまらなくてさ」

剛史「あっそ、それだけ？」

??? 「まあ待てよ、剛史てさ一体どこの学校？」

剛史「俺か、俺は文月学園」

??? 「ああ、新システムの学校のところか、いいなあ、俺もそこにすれば良かった。」

剛史「お前は、確か田舎の海近くにある学校だっけ？」

??? 「そうだよ！親がさあ、酷いんだよ。実家が近くあるってそれだけでここになっちゃたんだよ。お前はいいよな親が海外で働いてるんだよね。」

剛史「まっここにした理由は、学費が安いからだよ。」

??? 「えっ?!マジでいいな、俺もそっちに行きたい。」

剛史「ふあゝ…俺もう眠いから切るわ。」

??? 「わかった。んじゃ!！」

電話を切り俺は、ベットで眠りについた。

自分の部屋は注意にするべし!! (後書き)

ただいま???.を登場させようかなと迷っています。
できれば意見をお願いします。(名前を決めてません)

戦争は時として意外な展開もある。

次の日

俺は、いつもの窓側の席に座っていると木下が来た。

秀吉「お主が武久剛史かのう？」

剛史「ああそうだ。確かお前は木下……」秀吉「秀吉じゃよろしく頼むぞ」「そうかこちらこそよろしくな。」

そう言っただけで俺と秀吉は握手を交わした。

秀吉「そうじゃ、言っておくがワシは男じゃ」

剛史「何言ってるんだ？男だってことわかってるって」

秀吉「お主、ワシが男と分かってくれるのか！！」

剛史「いや…そんなにテンションを上げられても困る…ところで俺に何かようか？」

秀吉「そうじゃ、廊下で雄二が呼んでおったぞ。」

剛史「そうかありがとう、ところでよく女に間違えられるのか？」

秀吉「そっそうなのじゃ…」

剛史「まっ俺も自己紹介の時に少しだけ女と誤っていただけで制服を見て男だと確信した。」

秀吉「いったいどう言う目をしているのじゃ。」

剛史「んじゃ、俺は雄二のところへ行ってくる。あと俺のことは剛史でいいから俺はお前のことを秀吉って呼ばしてもらうわ。よろしくな」

秀吉「こちらこそよろしく頼むぞ。」

そう言ってあいさつを交わして雄二の所へ向かった。

剛史「呼んだか？雄二」

坂本「ああ今日はわかっているとは思うけどDクラスと戦うつもりだ。」

剛史「知ってるけど何故俺を呼んだんだ？」

坂本「お前にはDクラスの代表を殺してくれるか？」

剛史「何故俺なんだ？ 姫路にDクラスを殺ればいいだろう。それに何で俺だけに話すんだ？」

坂本「いや前のEクラスの戦いで、姫路が居ることがわかってしまったからだ。だから向こうも姫路に対して何か仕掛けてくるだろう。だがお前ことは誰も知らないから」

剛史「つまり相手の隙を狙ってDクラスの代表を殺るってことだな。」

坂本「ああそうだ。話が早くて助かる。まっ奴らには別の作戦を教えてお前のために道を開けてもらう。つもりだ。」

剛史「騙すならまず味方から言うわけかでも、それじゃつまらない、少し位俺にやらせてくれよ」

坂本「わかった。だがあんまり前に出るなよ。」

剛史「了解、教科はなんだ？」

坂本「数学だ。それしかしてないんだろ。」

剛史「まあな、んじゃ俺は寝かせていただきますわ。ふぁ〜…」

そう言って俺は教室に戻って寝た。

俺が寝ている間に秀吉から聞いた話だが明久がDクラスに宣戦布告をしてボロボロになって帰ってきたらしい。

そのあとに作戦会議をし、長谷川先生を確保して戦いに望むらしい。まっ今回は俺がやるんだから、でもまずはデモンストレーションだ。そして戦争の幕が上がった。

坂本「剛史ちょっとだけ行ってくれ人を確認してくれ」

剛史「わかった。んじゃ行ってくる。」

そう言って俺は教室を出て、にやりと笑いながら

剛史「長谷川先生召喚許可をお願いします。」

長谷川先生「承認します。」

剛史「試験召喚獣^{サモン}召喚……あれ？」

召喚獣は出たが、私服のような物が着ているだけで武器など何も持
って無かった。

そうやって考えていると

DクラスS「どんなに成績が良くても武器をもっていなきゃ問題な
い。みんなやれー！ー！！！！」

DクラスL、Y、U、B、T「やあー！ー！！！！」

剛史「うお！」

総攻撃を避けた。廊下に着地をしたが俺の召喚獣は尻もちを着いた、

剛史「あぶねじゃねか、俺にもお前らみたいなそんなムチや銃さえ
あればいいのにな……え？」

と言うと召喚獣の手にはムチと銃が出てきた。

剛史「お！すげー！でも何でだ？まっどうでもいいけど、さてとか
かってこい！」

そう言って六人相手と戦いが始まるのだった。

戦争は時として意外な展開もある。 (後書き)

Dクラス六人VS武久剛史
平均点数350点と523点
の戦い次回どうなるか？

雑魚でも油断は、禁物（前書き）

前回の続きです。
結構長いです。

雑魚でも油断は、禁物

Dクラス六人（平均350点）VS武久剛史（523点）の戦いが始まった。

DクラスL「それじゃ、俺が相手だ。」（武器…ランス）

DクラスB「あんた一人だけだと心配だわ。私も参加するわ」（武器…剣）

DクラスL、B VS 武久剛史
平均点数376点 532点

そう言って二人が出てきた。

剛史「いいぜ、そうしないと面白くない。」

DクラスB「先手必勝！」

急に攻撃を繰り出してきた。俺はぎりぎりで避けたが、DクラスLが猛突進をしてきたがそれも避けた。そしてムチでDクラスLを捕まえてそのままDクラスBに投げて命中した。

DクラスL「アイツなんてテクニックだ。」

剛史「猛突進をしたのがだめだったな。」

DクラスB「それじゃ、こっちはどう？」

剛史「!!」

隙を突かれてダメージを与えられたしまった。

剛史「痛いなくちゃっちゃんと終わらすか。」

そう言った俺は、ムチを使いDクラスLを捕まえて引き寄せて銃を構えて撃った。DクラスLの点数は0点にした。

剛史「来い! ソード、ロッド」

そう言ったら、ムチと銃が消えソードとロッドが出てきた。

剛史「やっぱりそう言うことか、さてとこれで終わりにしよう」

そしてロット投げたてDクラスBに当たった。そのまま俺の召喚獣は、一気に走り出して一刀両断にしDクラスBの点数を0点にした。

DクラスL、B VS 武久剛史
平均点数0点 点数509点

鉄人「0点になった戦死者は補習」

DクラスL「て鉄人」

DクラスB「鬼の補習はいやよ。」

鉄人「これはりっぱな教育だ。趣味と勉強、尊敬する人は、二宮金次郎と言う理想的な生徒にしてやるから覚悟しろ!」

DクラスB、L「いやーーーー！！！！！」

剛史「今のうちに」

鉄人に視線を集中している間に俺はFクラスに戻った。

剛史「戻ったぞ」

坂本「おっ！戻ったかムッツリーニ敵軍のリスト」

ムッツリーニがリストを持ってきた。

坂本「剛史敵の布陣はどうだった？」

剛史「この子とこの子とこの子とこの子はさっき補習へ行かせて……この子と……あれ？土屋だっけ？男子の方は？」

ムッツリーニ「……そんな物はない。」

剛史「用意しとけよ。」

坂本「なるほどな一人を除いて全員は数学が苦手な奴が多いな。」

美波「それじゃウチが突撃をする？」

坂本「最初からその予定だ。数学の長谷川先生も確保してある。須川！特別任務の準備だ。」

須川「了解」

坂本「全員出撃、作戦開始だ！」

そう言って美波とFクラスの奴が出て行った。

坂本「剛史ちよっといいか？」

剛史「なんだ？」

坂本「作戦を変更だ。みんなに言った作戦にしてほしいんだ。いやな予感がするんだ。だから教室で待機してほしい。」

剛史「……わかった。お前の勘を信じよう。」

そう言った俺は戦争を見ながら召喚獣の操作の練習をしていた。（しばらくの間は実況を送ります。）

次々と敵を倒していった。だが、新校舎にたどり着いた時に階段からDクラスの奴が先生を旧校舎に戻してしまった。そして、新校舎には古典の竹中先生がフィールドを承認して、向こうでは、苦戦し始めた。すると須川が階段を下りてどこかへ行ってしまった。美波の方を見ていると何か動揺している……と言うか嫌がっている？髪がオレンジで、ツインドリルの髪形の女子に嫌がっているのか？そう思っていると秀吉が助太刀に来…

{ピンポンパンポン}

須川「お知らせします。数学の船越先生、至急連絡があります。船越先生、吉井明久くんがDクラスの前で待ってます。」

剛史「……………え？」

須川「吉井明くんが教師と生徒の垣根を越えた男と女の愛の話があるそうです。至急Dクラスの前までお越しください。」

明久「須川」

と明久の声が聞こえた。目の前で船越先生らしき人が教室の前を通って行ってしまった。

Fクラス6 「吉井隊長あんたすごいよ。」

FクラスF 「クラスのために犠牲になるなんて！」

FクラスC「みんな吉井の死を無駄にするな!!!!」

全Fクラス 「おおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

坂本「平賀あまかったな。予備の数学なら確保してある。ムツツリ
ーニ竹中先生を排除！」

すると竹中先生の後ろにムツツリーニが表れて竹中先生の耳に何かしゃべっていると竹中先生は何か焦った顔をして立ち去ってしまった。だがこれで新校舎が数学のフィールドが島田がまた反撃に出た。すると無線機から

ムツツリーニ「進路オールクリア」

坂本「出番だ姫路！」

姫路「はい試験召喚獣」

姫路が出たEクラスを通りすぎた時に無線機からムッツリーニの声がした。

ムッツリーニ「…緊急事態」

坂本「どうした？ムッツリーニ」

すると掃除ロッカーや空き教室からDクラスの連中が出てきてFクラスに侵入してきた。計三人

DクラスP「いたぞ坂本だ。」

DクラスZ「護衛もいん」

剛史「ちょっと待った！！！」

DクラスP、Z、E「！？」

剛史「俺がいる三人まとめてかかってきな！」

DクラスZ「なめやがって、行くぞ。サモン」

DクラスP、E「サモン」

DクラスP点数

328点、武器…弓

DクラスE

278点、武器…ハンマー

DクラスZ

198点、武器…ランス

D クラスP、E、Z VS 武久剛史

平均点数269点 509点

剛史「弓にランスそしてハンマーかゝなら、ドリル、ロッド」

そう言って左手にドリルと右手にロッドが出てきた。

DクラスZ「P、お前は援護しろE行くぞ！」

DクラスE「お！」

剛史「さあゝこい！」

上からハンマー、正面からランスが襲ってきた。俺は左に避けたが弓の攻撃を食らった。

だが、すぐに体の体制を立て直して弓の奴にロッドを投げた。かすって10点のダメージを与えたがハンマーに吹っ飛ばされた。ランスが突進をしてきた。避けよとしたが右足に刺さってしまったって身動きが取れなくなったが、ドリルでランスの奴を突き倒した。がハンマーが襲いかかるがロッドを杖の代わりにしてかわした。

剛史「銃！」

ドリルを銃に変えて反撃して難とか弓の奴を倒した。だがハンマーの奴はものすごい暴れて反撃する隙がない

剛史「どうすれば…」

坂本「剛史！腕輪を使い！」

剛史「え？何それ？」

坂本「それは点数が高ければ能力が発動する。その代わりに点数を消費がある。」

剛史「そんなのがあるんならなおさら早速使おうし、腕輪の能力発動！！！」

そう言うのとロッドと銃が融合しスナイパーライフルになった。

剛史「よっしゃ！！いくぜ！！！」

スナイパーライフルを構えて隙を見ながらかわした。そしてハンマーが床に叩きつけられた隙を狙って撃った。相手は、吹っ飛んで倒れた。半分の点数を削った。武器の融合を解除し銃をドリルに変え腕輪の能力を発動させロッドとドリルを融合させてロッドの先にドリルが付いたドリルロッドになった。

剛史「すげーこんな武器は思いつかなかった…」

DクラスE「いちいち武器を変えてこれで最後だー！！！」

そう言ってハンマーが襲いかかってきた。俺も真正面に立ち向かった。

ハンマーが振り下ろす前にドリルロッドで突き刺し決着がついた。

坂本「やったな」

剛史「ああ…」

DクラスE、Z、E VS 武久剛史

平均点数0点 点数236点

ムツツリーニから通信が入ってきた。

ムツツリーニ「…雄二」

坂本「どうしたムツツリーニ？」

ムツツリーニ「…Dクラスの代表を平賀を姫路が討ち取った。」

坂本「わかった。ご苦労さんだった。」

剛史「やったな…」

坂本「ああ」

そう言ってハイタッチをした。

Dクラスの戦争に勝利した。

雑魚でも油断は、禁物（後書き）

1日で書くのは疲れるわゝ…

人の間違いは誰だってある。

Dクラスに勝利した俺達は、Dクラスの代表、平賀に設備を交換しない代わりに雄二は条件を突きつけた。
そして夕方、明久が戻ってきた。

明久「須川!!!!!!!!!!」

剛史「あっ、戻ってきた。」

坂本「落ちつけ明久」

明久「これが落ちついていられるか!!!!!! 須川の奴は何処行った?
!!!!!!!!!!」

坂本「安心しろ。須川は、俺が指示をしたからな。」

明久「貴さまかー!!!!!!」

と明久が雄二に襲いかかったが俺は明久を止めた。

剛史「明久落ちつけよ。」

明久「放して剛史僕はいいつをやらないと気が済まないんだ。」

剛史「まあまあそれより船越先生はどうした?」

明久「それなら近所の兄さんを紹介して切り抜けたよ。」

まだ暴れる明久に俺はこれを解決するいい方法を思いついた。

剛史「ちよっと島田さんだっけ来てくれない？」

美波「何？剛史…だっけ」

俺は、美波を呼び明久にちよっとひどいことをさせようと考えた。

剛史「あいさつは後にして実は明久がさあ…この前島田さんの事を「胸が小さい」て言ってたよ。」

美波「（ムカ）アッキー！！」

明久「えっ何？美波でイタイイタイ胸がないから耳があら骨にあたってグリグリこすれてものすごく痛い！！」

そして明久は気を失った。

美波「変なこと言うからそんなことになるよの！」

剛史「暴れてた明久を止めてくれてありがとう。一応あいさつをしないと、俺の名前は、武久剛史だ。よろしくな。」

美波「島田美波よ。よろしくね」

剛史「んじゃ、美波て呼ばせてもらうわ」

美波「ええ良いわよ」

俺と美波はあいさつを交わした。

剛史「ところで雄二」

坂本「なんだ剛史？」

剛史「今度の試召戦争は、Cクラスか？」

坂本「いや今度は、Bクラスをやる。」

剛史「わかった。んじゃ、俺はもう帰るわ。美波、明久を頼むよ。」

美波「わかったわ。」

剛史「んじゃ、また明日ね。」

俺は、教室を出て帰りに商店街の本屋に寄って本を探していた。
俺は、料理ジャンルの本を見ていた。

剛史「おっ！あった。手作りギョーザの作り方、これさえあれば冷凍ギョーザより多く食えるぞ♪」

ととても喜んで買って帰っている

不良「ねえちゃんいいじゃねえか俺と付き合ってくれよ。」

優子「なんであんと付き合わなきゃならないのよ帰ってもらえる。」

店と店の間で女子と不良が何かしているのを俺は、目撃した。

不良「釣れねーナなんで俺と付き合いたくねーンだよ！」

優子「あんた見たいなブ男を好きになるのがおかしいわよ。」

不良「んだと！この女^{あま}！……！！」

と不良が女子に殴ろうと襲いかかろうとしている。俺はダッシュして殴ろうとした腕を止めた。

不良「なんだテメえは！？」

剛史「まず女の子に暴力を振るなんてアホ以下だな。ちょっと持っ
ててくれない？」

女子に本を渡してボキボキと指を鳴らした。

不良「テメえ俺に力で勝てると思っているのか？あとアホ以下はテ
メえだ！……！！」

と変なことを言って殴ろうとしたが俺は手で受け止めた。

不良「！？」

剛史「力が何？」

不良「うっ……！！、グバ……！！」

そのまま俺は、腹と顔面を殴った。

剛史「さてと他に痛めつけられたい場所はどこ……あれ？」

不良は気絶していた。俺は弱いと思ってしまった。

優子「あ…あんだ…」

剛史「なに？これは持てっでありがとうな、んじゃ今度は気おつけろよ。」

優子「ちょっと待ちなさいよ。」

剛史「ん？何だ？」

と女子が俺を呼びとめた。

優子「助けてくれてありがとう」

剛史「いや別に、困っていたら助けたただけだ。それじゃ気おつけてな」

そう言った俺は、女子と別れて家に帰ってきた。

さっそく俺は、ギョーザを作り平らげて布団に入り寝ようした、でも俺は、助けた女子に違和感を感じていた。

剛史（今日助けた女子何処かで見たことがあるけど……まあいいや寝ようとZ Z Z Z）

と思いつつ寝た。

急な予定変更は、早めに伝えよう（前書き）

げんげんさんと羽入さん

感想ありがとうございます。

これからばりばりとやっています。

急な予定変更は、早めに伝えよう

次の日の昼休み

姫路と明久と雄二とムッツリーニと美波と秀吉と俺でサークルを作
って話していた。

明久「さすが瞬間接着剤ちやぶ台もすぐに直ったよ。」

秀吉「良かったのー。」

明久「2クラスも試召戦争で勝ってるんだよ。これぐらいは当然だ
よね。」

明久は、瞬間接着剤でちやぶ台を直していた。

剛史「でもAクラス勝てばもっと良い支給処かちやぶ台からシステ
ムデスクになるからな」

明久「そうだよな、でも雄二何でEやDクラスの設備を交換しなか
ったんだよ。」

雄二「なんだお前あんな教室が、良いのか？」

明久「でもこの教室よりは、少しはましな学園生活がおくれるに決
まってるじゃないか」

明久がちやぶ台を叩きたがベチャと変な音がした。

剛史「明久自分の手を良く見ろ」

明久「えっ!？」

明久が叩いたのはちやぶ台ではなく瞬間接着剤を叩いてしまったためちやぶ台と手が引っ付いてしまった。

明久「ちよっムグググがあーうご!!」

離そうとしたがちやぶ台とくっ付いてしまっただけで離れなく明久はそのまま倒れてしまった。

美波「どうせアキは勉強をしないんだから関係ないでしょう。」

明久「関係なくないよ机はごはん食べたり、昼寝したり、ラクガキしたり学園生活の大事なパートナーじゃないか!」

ムツツリーニ「...と言うより一心同大」

雄二「そのちやぶ台も今日だけだ。俺達はAクラスに宣戦布告されたんだからな。」

剛史「あれ?いつされたの?」

秀吉「そうか剛史はその時にいなかったのーお主が帰った時にAクラスに宣戦布告されたんじゃない。」

剛史「なるほどな」

雄二「得にも書くにもAクラスに勝てばいいんだ設備が手に入るんだ。少し計画が変わったが問題はない。ことはすべてシナリオ道理

に進んでいる。な姫路」

姫路「えっ！はい……」

話が終わる雄二が立ち上がり

雄二「さてAクラスに乗り込むぞ」

剛史「何のために？」

雄二「下見だ。」

そう言っただけ俺達はAクラスにきて中に入った。

美波「ここがAクラス？」

秀吉「まるで高級ホテルのようじゃの」

剛史「どれもこれも最新機器ばっかだな。」

明久「ふん、僕が学園生活を送るためにはふさわしい設備じゃないか」

美波「見てアキ！フリードリンクにお菓子が食べ放題よ！」

明久「そんなのにいちいち驚いてたら足元を見られるよ。もっとどうと構えていけ」

秀吉「ことごとく発言と行動とも合わんのー」

剛史「全くだ手にちやぶ台ついてるのにな。」

そう言った俺はお菓子に手を出していた。

優子「あら？開戦は明後日じゃないの？」

秀吉「姉上！」

優子「もう降伏しに来たの？」

雄二「もうすぐ俺達の物になる設備の下見だ。」

優子「ずいぶん強気じゃない。」

雄二「交渉に着た代表同士の一騎打ち申し込みたい。」

ここにいる全員「!？」

優子「あなたがバカじゃないの？一騎打ちで勝てるわけがないですよ。」

雄二「怖いのか？確かに終戦直後に弱つてるときに弱小クラスに攻め込む卑怯者だしな。」

優子「今ここでやる？」

こんな話をしていると一人の女子が着た（俺はその時お菓子を食べてながら見ていた。）

霧島「：優子待って、一騎打ち受けてもいい。」

優子「代表！」

剛史（ふーんあの子が代表か）

霧島「：その代わり条件がある。：負けた方はなんでも言うことを聞く。」

するとAクラスの代表はとんでもない条件を切りつけてきた。

雄二「それがFクラスに宣戦布告をした理由か？」

優子「勘違いしないで、私たちAクラスには学園の治安や品格を守る義務があるの。一学期そうそうなんも努力積まないうちに戦争を遣らかしたバカへの制裁なのよ。」

雄二「いいだろう代表同士の一騎打ち、負けた方が言うことを聞く。」

優子「一騎打ちじゃないわ、5VS5よ」

Fクラス「！！」

霧島「：優子」

優子「まさか代表が負けるとは思わないけど慎重になることにこしたことはないわ。」

優子「いいだろ5VS5で構わない。その代わり対戦教科の選択はこっちがもらう」

霧島「：わかった。」

雄二「交渉成立」

とうとうAクラスの勝負いっただいどうなるのか？

人の関係は他人が言うものではない(前書き)

前回の続きです。

人の関係は他人が言うものではない

雄二のい話が終わりAクラスを出ようとした時

優子「!! ちょっとあんた待ちなさい」

剛史「ん? 俺?」

優子「そうあんたよ」

俺は呼び止められた。

明久「どうしたの?」

剛史「ああ別に先に行ってくれ」

雄二「そうか、じゃ先行くぞ」

剛史「俺も後で行くから」

みんなは先にAクラスを出て行った。

剛史「んで何?」

優子「この前はありがとう」

剛史「別に大丈夫だってだいたいあんなの普通に助けるだろ。そういや秀吉の双子の姉だよなところで名前は何?」

優子「木下優子、それより昨日のお礼をさせて」

剛史「んじゃこの菓子をもらうと言うことでお会い子で」

優子「えっ！？それだけでいいの？」

剛史「うん、それじゃ今度は試召戦争で」

そう言って出て行って屋上へ向かった。

屋上ではムツツリーニ、明久、雄二、美波、秀吉がちゃぶ台を囲って話していた。

剛史「やっぱりここの居たか」

秀吉「おお着たの姉上に何か呼び出されたようじゃが」

剛史「別にたいしたことはないあとこれ菓子をもらってきた。」

明久「やったー！ちょうどお腹すいたところなんだ。僕しばらく水と塩しか食べてないんだ。」

剛史「水と塩だけかよあと食べてるじゃなくて舐めてると飲んでると言うんだよ。」

明久「安心してくれ砂糖も食べてるから」

坂本「どっちも同じだろ。」

剛史「そんなことは、ほっといていったいどんな話していたんだ。」

秀吉「Aクラスの代表、霧島の話をしていたのじゃ。」

剛史「なんかあるのか？」

秀吉「うむ、妙な噂があつての」

明久「噂？」

秀吉「成績優秀、才色兼備あれだけの美人なのに周りには男子があらんと言う話じゃ。」

美波「へえーモテそうなのに」

秀吉「噂では、男子に興味がないらしい」

明久「男子にはてっ・・・」

剛史「まるで女子に興味があるみたいだな。」

明久「！！まさか霧島さんの目的って」

なりやら明久は慌手だしムツツリーニはカメラの準備をし始めた。

明久「ままままさかそんなことないよね、剛史」

剛史「でも美波は心当たりがある顔をしているぞ。」

美波「いるはそんな子」

剛史「何処に？」

美春「見つけましたお姉さま!!」

すると女の子が美波の胸に飛び込んで行った。

美波はたまらず倒れた。

美波「み、美春！」

美春「ひどいです。お姉さま美春を捨ててこんな汚らしい豚どもとお茶なんて」

美波「離さない!!」

明久「誰？」

ムツツリーニ「…二年D組 清水美春^{しみずみはる}」

そのまま美春は美波に甘えるように抱いている。

剛史「なんか主人に甘える猫みたいだな。」

美波「ウチは普通に男子の方が好きなの! アキ何か言って!」

明久「そうだよ清水さん女同士なんて間違ってるよ。確かに美波は見た目や性格、胸のサイズも男と見分けがつかないおんなじがみグ
アーーーー!!!!」

美波「ウチはどう見ても女でしょ!」

美春「そうです。美春はお姉さまを女性として愛しているんです。」

剛史「あゝあ折角のお菓子が」

明久が変なことを言ったから美波と美春にプロレス技で苦しめられた。

その隙にムツツリーニはスカートの中を覗こうとした。

明久「グおー！助けて美波何でも言うこと聞くから」

美波「ほんとに！？んじゃ今度の休み駅前にできたグレープ屋でグレープ食べたいな」

明久「え！？そんなことしたら僕の食費が「美波「ああん？」」グあゝー！！！！ぜひおごらせていただきます。」

美波「それから…それから…ウチのことを愛していると言いなさい！」

明久「は…はい言います。」

美春「させません！」

美波「言いなさい！」

明久は両腕を痛めつけられてる。

俺と秀吉と雄二は見ているしかない。

明久「う…う…ウチのこと愛してるって言いなさい！」

美波「この…バカー…」

[illegible]

ボキとてつもない音が聞こえた。

人の関係は他人が言うものではない（後書き）

いま自分の作品を見直してみるとオリ主の出番が少ない？
もうちょっと出番増やした方がいいかな？

問題集（前書き）

Aクラスの戦う一日前に回復試験を受けた時の珍回答です

問題集

国語

問題…右往左往の意味と読み方を答えなさい。

姫路の答え「うおうさおう

混乱しうろたえて、右に行ったり左に行ったりするこ
と。また、混乱して秩序がないたとえ。」

教師のコメント「正解です。さすが姫路さんうおうざおうと読むこ
とをもできます。」

剛史の答え「うおうふく さおうふく

右に行き帰り、左に行き帰り」

教師のコメント「誰も行き帰りしていません。」

明久の答え「みぎおうひだりおう

行くと見せかけて行かないこと」

教師のコメント「フェイントをかけないでください。」

問題…焼き餅焼くとして手を焼くなの意味を答えなさい。

姫路の答え「他人をうらやんだり妬んだりすると結局は自分に災い
が降る事になるので適度にしなければならぬという事。」

教師のコメント「正解です。」

雄二「逆恨み」

教師のコメント「それは本来恨まれるべきものが、逆に相手を恨むことです。」

剛史の答え「焼いていた餅に手をかけようとしたら手に火傷をしてしまった。」

教師のコメント「確かにそうですね…」

明久の答え「餅が焼けました!!」

教師のコメント「だが焦げていた。」

数学

問題…1個80円のプリンと1個250円のケーキを合わせて15個買ったところ、代金は1710円になりました。プリンとケーキをそれぞれ何個ずつ買いましたか。

姫路・剛史の答え「プリン12個 ケーキ3個」

教師のコメント「正解です。」

ムッツリー二の答え「全部…」

明久の答え「買い忘れた。」

教師のコメント「それは、ありません」

社会

問題…1773年ボストン港であるものが海に投げ捨てられました。
あるものとは何でしょうさらにこれを何事件と言うのでしょうか？

姫路の答え「お茶、ボストン港茶会事件です。」

教師のコメント「正解です。」

剛史の答え「船、船落とし事件」

教師のコメント「大層なことですね」

明久の答え「ゲーム、ゲーム奈落事件」

教師のコメント「この時代にはゲームはありません。」

英語

問題…It is important to get to know the rule of a game. を訳しなさい

姫路の答え「ゲームのルールを知ることが重要です。」

教師のコメント「正解です。」

剛史の答え「ゲームを知ることが重要です。」

教師のコメント「そこまで必要はないと思います。」

ムッツリーニ「ゲームを知ってる。」

教師のコメント「gameとknowを略しただけですね。」

明久「ゲームゲット!!!」

教師のコメント「点数はゲットできませんでした。」

化学

問題…幼生期には鰓^{エラ}で呼吸しますが、成長すると肺で呼吸します動物は何類ですか答えなさい。

姫路・明久・雄二・剛史・秀吉「両生類」

教師のコメント「正解です。」

ムッツリーニ「両性類」

教師のコメント「性と言う字が間違ってます。」

美波「両星類」

教師のコメント「何処の惑星の動物ですか？」

問題集（後書き）

次回はAクラスとの戦いです。
お楽しみにしてください。

圧倒的な敵には数で応戦すべき

Aクラスとの決戦当日

Aクラスで戦いが始まりそうとなっている。

高橋先生「それでは、一回戦を始めます。」

美波「それじゃ、行ってくるね。」

優子「さっさと終わらせましょう。どうせ試合にならないんだから。」

美波「Fクラスだからて嘗めないでとね」

高橋先生「教科は何にしますか？」

美波「数学でお願いします。」

一回戦は、島田美波VS木下優子の数学勝負が始まる。

高橋先生「それでは、両者準備はよろしいですね。」

優子・美波「はい」

高橋先生「それでは、始めてください。」

美波「サモン」

すると召喚獣が出てきた。

美波「ウチは数学ならBクラスの並なんだから」

優子「あらすごいんですね。でもサモン」

そう言って優子の召喚獣が出てきた。

数学

島田美波（187点）武器…レイピア

VS

木下優子（367点）武器…ランス

優子「私は、もちろんAクラス並ですけどね。」

優子はそう言って美波の召喚獣が一撃でやられた。

高橋先生「勝者Aクラス、木下優子」

Aクラスがまず一勝してしまった。

美波はちよつと落ち込んだ様子で戻ってきた。

明久「仕方ないよ。Bクラス並じゃAクラスに勝てないことわからない程度の頭が酸素がた・り・な・いーーーーー!!!!!!」

明久が余計なことを言うからまた美波がプロレス技をかけられている。

その隙にムツツリーニがスカートの中を覗こうとしていた。

高橋先生「二回戦を始めます。選手前へ」

佐藤「Aクラス佐藤美穂です。」
すでに召喚獣が出ていた。

剛史（鎖鎌か）

坂本「よし明久おまへ」

剛史「俺が行くぜ！」

そう言った俺は前に出て行った。

坂本「おい剛史、勝手に行くな」

剛史「だって、相手鎖鎌だし俺が出るしかないでしょう。」

坂本「お前な、まず理由にもなってないぞ。」

剛史「んじゃ、俺がいくぜ。」

明久「雄二大丈夫なの？」

坂本「わからん」

高橋先生「教科は何にしますか？」

剛史「化学で」

高橋先生「両者、準備はよろしいですね。」

剛史「おう」 佐藤「はい」

高橋先生「それでは初めてください。」

剛史「サモン」

化学

佐藤美穂（435点） 武器…鎖鎌

VS

武久剛史（503点）

剛史「来い！ ハンマー、ムチそして腕輪発動」

ムチとハンマーが出てきて融合すると鎖球くさりだまになった。球は左手に固定し、球の周りにはトゲが無数にあり先端は錨いかりの形をした。そこから伸び縮みしてムチ見たいに扱うこともできる。

剛史「うわゝー！ー！！！！！！！！！！」

いきなり相手の鎖鎌が飛んできてギリギリで避けた。

俺は、反撃しようと一気に間合いを積めて殴ろうとしたが避けられてしまった上に鎖鎌が飛んできた。難とか鎖球で受けさせた。

剛史「こんなのじゃ、らちが明かない。ブーメラン」

そう言ってブーメランが出てきた。

そのブーメランを投げたが、ジャンプして避けられてしまった。でもそこが狙い鎖鎌が襲い掛かってきたが軽々避けて、鎖で相手をつまえてそのまま引き寄せ近くまで来たときに鎖球で殴って、点数を

0にした。」

高橋先生「勝者Fクラス」

明久「やったね。」

美波「Aクラスを倒すなんてすごい。」

秀吉「あの点数ならAクラスにいけるんじゃないのか？」

剛史「あの点数なら確に行けるが俺は苦手教科が多いんだよ。それにしてもここから見物かゝ暇だな。」

高橋先生「それでは三回戦を始めます。」

ムツツリーニが立ち上がり前に出た。

高橋先生「教科は何にします？」

ムツツリーニ「∴保健体育で」

工藤「君、保健体育が得意だって？でも僕もかなり得意なんだよ。君と違って実技でね。」

ぶしゃーとムツツリーニが鼻血を噴射した。

明久「ムツツリーニ！！ひどいよくもムツツリーニを」

工藤「君が選手交代する？でも君、勉強苦手そうだね、良かったら保健体育でも教えようか？もちろん実技でね。」

と明久も噴射した。

姫路「明久くん」

美波「アキ」

姫路と美波が明久のそばに来た。

美波「余計なお世話よ。アキに永遠にそんな機会はないから。」

姫路「そうです。吉井君には金輪際必要ありません」

明久「どうしてそんな悲しいことを言うの？（泣）」

明久が言った後ムツツリーニが立ちあがった。

明久「ムツツリーニ!？」

ムツツリーニ「……大丈夫これしき」

高橋先生「それでは始めてください。」

工藤・土屋「サモン」

保健体育

工藤愛子（433点）武器…斧

VS

土屋康太（?点）武器…小刀

明久「400点オーバー!?!」

工藤「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげる。」

工藤の召喚獣はムツツリーニの召喚獣に向かって行く。

工藤「バイバイ、ムツツリーニ君!」

ムツツリーニ「…加速」

するとムツツリーニの召喚獣は急激に速くなって通り過ぎ、合い打ちと思われたが

ムツツリーニ「…加速終了」

工藤の点数は0になっていた。

保健体育

工藤愛子(0点) 武器…斧

VS

土屋康太(576点) 武器…小刀

工藤「そ、そんなこの僕が」

高橋先生「勝者Fクラス」

明久「強い!保健体育だけで僕の総合科目並の点数だよ。」

剛史「これで二勝一敗だな。」

高橋先生「それでは四回戦を始めます。」

明久「姫路さん頑張って」

姫路「はい」

久保「では、僕が出よう。」

両者が前に出て行た。

坂本「久保利光か…ここが正念場だな。」

明久「どうして」剛史「なぜだ？」

雄二「奴は学年次席、不得意科目でも衝かなければ苦しい」

高橋先生「では、教科は何にしますか？」

久保「総合科目でお願いします。」

剛史「おい！科目はこっちが…」

姫路「構いません。」

明久「姫路さん…」

久保「サモン」

姫路「サモン」

総合科目

久保利光（3997点）武器：鎌×2
VS

姫路瑞希（4406点）武器：剣

美波・明久「四千点オーバー!?!」

坂本「学年次席に匹敵する点数だな。」

周りのみんなが驚いているが剛史は…

剛史「しかし両方ともあれだけの点数があればそう簡単に倒れない
だろ」

剛史はそう呟いたが誰も聞いてなかった。

久保「何時の間にそんな点数を!?!」

姫路「私決めたんです。頑張ろうて」

そう言って白熱のバトルを繰り出している。

久保はビームを出したが、ガードで伏せがれた。そのまま姫路が反撃をしようとしたが久保が鎌を一個投げたが避け一撃を決めようとしたが

剛史「まずい!!」

剛史は勘付き久保は姫路の腹を切って点数は0にしてしまった。

高橋先生「勝者Aクラス」

姫路「すいません…」

坂本「なあに心配はない、俺が勝てばいいだけの話だし」

姫路「でも…」

坂本「大丈夫だ姫路はよくやってくれた。」

泣きそうな姫路さんを雄二がフォローしている。

高橋先生「では第五回戦を始めます。教科は何にしますか？」

雄二「勝負は日本史の検定テスト対決でお願いいたします。内容は小学レベル、方式は百点満点のじょうげんあり」

剛史「あれ召喚獣バトルじゃないの？」

姫路「テストに応じた勝負なら教師が認める限りどんな勝負をしてもいいんですよ。」

剛史「へえーそうなんだ。」

説明を聞いた剛史は納得したところで雄二が戻ってきた。

明久「どう言うことだよ。雄二」

秀吉「小学レベルの問題じゃと二人とも百点取れるのは当たり前じゃ」

美波「それじゃ引き分けじゃない。」

姫路「いいえ、小さなミス一つで負けることですよ。」

明久、秀吉、美波、剛史、ムッツリーニ「!!」

坂本「その通り学力じゃなくて、注意力と集中力の勝負になる。」

明久「雄二…」心配するな。勝算はある。」

剛史「なんだ勝算で」

坂本「それは翔子は一度覚えた覚えたことは忘れないんだ。」

明久「それじゃ暗記力勝負の歴史は不利じゃないか。」

坂本「いや、そこが落とし穴だ。奴はな大化の改新を無事故の改新、625年と間違ったまま覚えている。もしその問題ができれば俺はその勝負に勝てる。」

明久「待ってよ雄二」

雄二「なんだ？」

明久「大化の改新で625年じゃないの？」

雄二「無事故の改新645年だ！この情報は本物だ。信用しろ明久」
明久「雄二…」このクラスのシステムデスク、俺達の物にしてやる。」

そして場所は移り雄二と霧島は席に付き他はAクラスで見っていた。

高橋先生「それでは始めてください。」

その一言で俺達のクラス設備の運命の最終戦が始まった。

そしてテストが終わりは採点の終わりを待つだけであった。

高橋先生「それでテストの発表をします。Aクラス霧島翔子93点」

一気にFクラスはテンションが上がり、Aクラスはガタ落ちしてしまってる。

が！

高橋先生「続いてFクラス坂本雄二53点」

すると一気に空気が変わってしまった。

圧倒的な敵には数で応戦すべき（後書き）

長くなってしまった。

誠にすいません

本当の…（前書き）

最近、小説のネタが思いつかないなあ

本当の…

夕方のFクラス

結局Aクラスに負けてしまった。せいでちやぶ台からミカン箱になっってしまった。

明久、坂本、秀吉、美波、姫路、ムツツリーニ、剛史は今Fクラスにいる

明久「前よりひどくなったじゃないか！何なんだよ雄二あの点数は！？」

坂本「いかにも俺の実力だ。」

と明久と坂本のやり取りが続いていた。

明久「自分が百点とれなきゃ作戦のやくに立たないだろう」

坂本「まさかあんな伏兵が潜んでいるとは意外だったな…」

明久「自分が伏兵になってどうするんだよ」

霧島「…雄二」

明久・坂本・秀吉・美波・姫路・ムツツリーニ・剛史「！？」

振り向くと霧島がドアの前に立っていた。

霧島「…雄二、約束」

明久「約束で、何でも言うこと聞くて」

坂本「ああ、わかっている。何でも言え」

するとムツツリーニがカメラを構えた

明久「いいけないよ霧島さんお女同士だなんて…」

と言いつつ明久はムツツリーニのカメラのお手伝いをしていた。だが……

霧島「…雄二、私と付き合っしてほしいの」

明久・ムツツリーニ「え？」

坂本「お前まだ諦めてなかったのか？」

霧島「私は諦めないずっと雄二が好き」

坂本「拒否権は？」

霧島「ない、約束だから今からデートに行く」

坂本「え？ちよつまで「バン！」グバああー」

雄二は倒れ霧島と一緒に何処かえ行ってしまった。

美波「今の何だったの」

姫路「さあ？何でしょ」

明久「それじゃ、霧島さんが姫路さんをみていたのは？」

秀吉「おそらく雄二の近くにいた女子が気になったじゃろうか？」

剛史「そう言えばEクラスの戦の作戦会議の最後の方で女子がいたな。あれ霧島だったのか」

ムツツリーニ「…はあ…」

明久「あのごめん姫路さん前よりひどい教室にしてしまっ

姫路「いいえ、私大好きですよこのFクラス」

明久「姫路さん…」

美波「さあてとあアキグレープ食べに行こう♪」

明久「え？それは週末の話じゃ」

美波「週末は週末、今日は今日さあ行きましょ」

明久「えー！そんなことしたら、僕の食費が」

姫路「駄目ですよ。明久くんは今から私と一緒に映画に行くんですよ。」

明久「えっ！？姫路さんそれは、話題すらあがってないよ」

姫路「はい、今決めたんです。」

美波「ほら早くグレープ食べに行くわよ」

姫路「どんな映画に連れしてくれますか？」

明久「そんなーいやー！セクシーが栄養がー！助けてちょ…」

とそのまま明久は姫路と美波に連れてかれた。

秀吉「あいつはもしかしたら本物のバカかもしれの。」

ムツツリーニ「…うん」

剛史「全くだ。んじゃ俺も帰らせていただくわ」

そう言って、出て行き家に向かった。

そして家に着いて武器の手入れをしていると電話が鳴り、それに出ると…

??? 「もしもし？」

剛史「あれどうした。」

??? 「喜べ」

剛史「何が？」

ピッ（電話を切った音）

??? 「俺はなお前のところに行……………」

剛史「急に何言いだすんだと思えば」

プるるるる、プるるるる ピッ

剛史「はい？」

??? 「何切るんだよ！」

剛史「だって…それにしてもお前ほんとか？」

??? 「本当だ。お前のところに行くから待っている。言い忘れた
がお前の家で寝るから」

剛史「またお前身勝手に」

??? 「お前の親に許可は取っているから」

剛史「言葉がでないは」

??? 「んじゃ、よろしくね」

剛史「あいつ勝手に切りやがって、はあ匠が来るのか。めんどくさいなあ…」

休日の過ごし方は体を休めるのがいい（前書き）

オリ主の休日と新キャラの登場だ。
お楽しみに！

美波「今からアキと一緒にクレープを食べに行くのよ」

剛史「ふーん、んじゃ俺は行くは明久によろしくな」

美波「わかったわ、それじゃ」

美波と別れゲームセンターに向かった。

ゲームセンターでプレイしていると肩に叩かれ後ろを向くと

匠「よ!」

剛史「あれ?なんだお前か…来るの早くないか?」

そこには匠の姿があった。

匠「下見だよ。下見」

剛史「匠さあ、ここに来るのに時間かかったろ。」

匠「片道四時間だよ四時間」

剛史「二回言わなくてもわかるから」

匠「実はさ、剛史の家を知りたくてさ」

剛史「なら何でここにいるんだ?」

匠「来る途中で見つけて面白そうだったから」

剛史「あっそ、ところで俺家、知っているんか?」

匠「・・・・・・・・知らない」

剛史「んじゃ・・・これ渡し得から覚えとけ」

俺は、俺家が行き方が書いた紙を渡した。

匠「わかったよ、んじゃ帰るわ」

剛史「？ 俺家に行くんじゃないのか？」

匠「いや・・・もう時間ないから」

剛史「あつそ、じゃな」

匠「それじゃ」

何だかんだで、別れて

俺は、しばらくゲームセンターで遊んで、金が無くなり家に帰ろうと家に向かう途中で明久と姫路と美波が慌てた様子で、走ってきた。

明久「剛史！！」

剛史「あれどうしたの？」

姫路「お願いがあるんです。」

剛史「何だよ急いで」

美春「待ちなさいこの豚野郎！！」

剛史「ん？」

すると両手に複数のフォークを持った女子が走って来てる。

剛史「なんだ？」

美波「とにかく頼んだよ」

と美波に腕を引っ張れて前に出されるとフォークを持った女子が俺に襲いかかってきた。

俺は両袖からダガーを出しなんとか防いだ。

美春「お姉さまの腕を掴むなんてこの薄汚い豚野郎は美春が成敗いたします。」

剛史「はぁ？何のことだ？だいたい掴んでないどころか全くの逆だし」

なんだか、訳分からなくなってしまった。しかも何回も攻撃を繰り返し防ぐのがやっとだ。

剛史「明久、どうしたら、言うことになるん・・・ていなし明久！」

そのまま明久を追いかけた。

だが、俺は走るのが苦手だ、途中でバテてしまい、湖の公園で一息しているとそこに秀吉が偶然に会った。

剛史「あれ？秀吉じゃん、どうしたその格好は？」

秀吉「演劇部の衣装じゃ」

剛史「それにしちゃメイド姿なの？」

秀吉「部員がワシ用て言われての」

剛史「そーいや明久たち見た？」

秀吉「見たがどこかに行ってもうた。」

剛史「あつそ、もういいや俺は帰る。」

秀吉「そうか、それじゃまた学校で合うのじゃ」

剛史「ああ・・・」

そして別れ家で体を休めた。

好きな食べ物でも毎日食べてると飽きてしまう（前書き）

2012年明けましておめでとうございます。

これからも『バカと武器と召喚獣』をよろしくお願いいたします。

好きな食べ物でも毎日食べてると飽きてしまう

日曜日

文月学園

剛史達は、今補習をしている。

何故って？それは、Aクラスの戦いで負けたせいでクラスの担任が入れ替わり鉄人がFクラスの担任になったため折角の日曜日なのに学校に来て補習を受けている。

チャイムが鳴り補習が終わって昼休み

鉄人「今日は、ここまで帰ったらちゃんと復習するように」

そう言って教室が出て行き、「やっと終わった」と皆はくたびれていた。

するとお腹が鳴る音が聞こえた。

明久「あゝお腹が空いた。今日はさんざん働かせたから余計に疲れたよ。」

美波「便利なようで不便な召喚獣ね」

剛史「全くだ。ところで何でお前は観察処分者なのか？」

明久「それは・・・」

スー ↑引き戸が開ける音

霧島「…雄二、お昼」

霧島がお弁当を持って入ってきた。

Aクラスは補習が無いのに

坂本「翔子！何で？Aクラスは補習は無いのに」

霧島「：一人で自習してた。雄二がいるなら日曜日でも来る。」

坂本「来なくていい」

霧島「：雄二が来ないなら平日でも来ない」

坂本「それは問題だろ」

と雄二と霧島がやり取りしている間に明久は弁当を出していた。

秀吉「明久は今日は弁当かの」

秀吉が言い明久が弁当を開けると弁当からちっちゃ四角がそこにはあった。

坂本「なんだそれは？」

剛史「サイコロか？」

明久「失礼だな、列記とした食べ物だよ。1／67のカップ麺」

坂本「1／67？」

明久「半分の半分の半分の半分の半分」

剛史「違うぞ明久1／64だ！分数の計算位ちゃんとしろよ…」

明久は1／64のカップ麺を食べたがやはり小さいから一口で終わってしまった。

明久「ごちそうさまでした。」

剛史「悲しいお昼だったな」

明久「仕方ないじゃないか今月の食費が無いんだから」

雄二「あのゲームの山を売ればいいじゃないか」

明久「なんてこと言うんだ！何物にも代えがたい優秀な作品の数々を食べられるものに変えられる訳が無いじゃないか！！！！！！」

ムツツリーニ「…自業自得」

美波「しよしようがないわね。ウチのお弁当を分けてあげようか？」

明久「ほんと！？」

美波「作りすぎて余った分を持ってきたの捨てるの勿体ないから食べる？」

明久「食べる！」

美波「ちょっと待っててね……あれ？……あれれ」

美波はバックの中の弁当を取りだそうとしているが慌てている。
そして、明久の方を見る。

美波「ごめん、家に忘れてきたみたい」

明久「そんなー…」

美波「折角作ってきたのに」

明久「いいよ。お弁当作るなんてそんな女らしいこと美波ができ
kしが碎ける!!!!」

美波「持ってきたの忘れたって言ってるでしょ!!」

明久がまた余計なことを言うから美波にプロレス技をかけられてる。
ムツリーニも美波のスカートを覗こうとカメラを構え
そしてなぜか雄二が目を押さえて痛がっていた。

秀吉「相変わらず賑やかじゃの」

剛史「本当だ」

葉月「あのーすいませんバカなFクラスってここですか」

秀吉・剛史・明久・坂本・霧島・美波・姫路・「ん？」

すると賑あつてる所に小さな女の子がいた。

美波「葉月どうしたのこんなところに？」

葉月「あっ！ お姉ちゃん！」

明久「は葉月って…」

葉月「あっ！ バカなお兄ちゃん」

坂本「すごいな明久、お前のバカが全国に知れ渡っているとわなー」

剛史「意外だったな。」

明久「せめて町内と言って！」

葉月「やっぱりバカなお兄ちゃんです！」

と言いながら明久に抱きついた。

美波「ちよつと葉月どうしてアキのことを知っているの？」

葉月「だって葉月のお婿さんだもん♪」

その言葉聞き俺も皆は驚きを隠せない

葉月「バカなお兄ちゃんとは結婚前提にお付き合いしているんです。」

明久以外は全員が驚いている。

美波「ちよちよつとアキ！ ウチの妹に何…」

バン！！ ↑（叩く音）

須川「これより異端審問会を開く」

明久「うわーーーーー！何すんのみんなーーーーー！！！！！」

いつの間にか明久は十字架に縛られて周りには黒マントを被ったFクラスの奴らがいた。

剛史「なんだあれ？」

須川「罪状 被告吉井明久は異端審問会の血の盟約に背き、自分一人だけ女のこと付き合う大罪を犯した。これは事実には相違ないか？」

FFF団「相違ありません」

バン！！！！！！ ↑（叩く音）

須川「被告言い残すことは？」

明久「何で弁護の前に遺言なの？」

須川「有罪 死刑」

その一言で明久は酷い目に遭っている。

そんなのを無視して話を再開した。

秀吉「お主何年生じゃ？」

葉月「小学五年生です。」

雄二「明久よりしっかりしているな」

葉月「あっ！きれいなお姉ちゃん」

瑞希「こんにちは葉月ちゃん」

明久「あゝーーーー！！！！いた！！！！」

明久が飛んできたが無視して話を続ける

秀吉「それでお主何しにここに？」

葉月「あ、そうでした。はいお姉ちゃん」

と二つの弁当を美波に渡した。

美波「うちのお弁当ありがとう葉月、よっかた二つとも持ってきてくれたんだ。ほらウソじゃなかったでしょウチだってお弁当位作れるんだから」

葉月「なくんだそうだったですか」

剛史「何が？」

葉月「お姉ちゃんが珍しく早く起きて張り切って作ってるからどうしたのかな？て思ったらバカなお兄ちゃんのために食bむ！」

美波が葉月の口を押さえ話を強制終了をさせた。

美波「な…何を言ってるのかしら変な子ねえ」

秀吉「ほおーその弁当は明久のために作ってきたのか」

美波「違うわよ!!! ウチがアキにそんなことするわけないでしょ!!!」

剛史「んじゃ、美波「張り切っていた」て何だ?」

美波「そそれはお弁当じゃなくてつまりあれよ! プラモデルよ!」
それを聞き皆が驚いた。

明久「プラモデル!？」

美波「1／35のキングタイガーよ」

明久「ド…ドイツ戦車…」

坂本「よかったな明久1／64のカップ麺より大きいぞ」

明久「大きさかよ」

秀吉「意外に行けるかもしれんぬ」

明久「無機物だよ食べられないよ!!!」

剛史「安心しろお前ならいける。頑張れ」

明久「何を頑張ったらいけるんだよ!!!」

美波「とにかく！これはただのあまりモノなんだからアキのために作ったんじゃないからね」

と美波が無理やり誤魔化した。

そして姫路が隣でもじもじしている。

剛史「どうした姫路？」

姫路「い…いえ何でもないんです。」

手を見るとお弁当を持っていた、

土屋「…それお弁当」

坂本「へえー姫路も作ってきたんだ」

姫路「は…はい、あんまり上手じゃないですけど…」

グウ~~~~ ↑（明久のお腹の音）

皆があきれた顔をした。

姫路「あ…あの…これ実は吉井君に作ってきたんです。吉井君よかったですこれ食べてくれますか!？」

姫路が思い切って言ったが明久は…

バン!!!!!!!!!!!!!!!! ↑（叩く音）

姫路「!？」

明久は丸焼きの拷問をうけた。

そして美波は、教室を出て行き廊下に出てすぐのところで壁にもたれかかり悲しそうな目で「バカ」とつぶやいていた。

屋上にて

姫路が飲み物を取りに行ってる。

その隙に剛史と坂本と秀吉とムツツリーニで姫路の弁当を食べた。

だか：

剛史「ぐばーーーーー……！！！！！！」

坂本「ムぐッ！！！！」

秀吉「うっ！！！！」

ムツツリーニ「……！！」

姫路の弁当を食べた四人は気を失ってしまった

明久「雄二！秀吉！剛史！ムツツリーニ！どうし……まっまさかこのお弁当が……そんなバカなこんなおいしいそうなお弁当なのに……」

明久はお弁当を持っておいを嗅ぐと

明久「ぐは……！！！！！！！！！！」

と明久も気を失いちよつとすると目覚めた。

明久「はっ！危なかった、危うく魂を持ってかれるところだった。間違いない皆が倒れたのはこのお弁当のせいだ。臭いだけでこんなに危険なんて…」

秀吉「あ…明久よ……さ…皿を取ってく…れないか」

明久「皿？」

秀吉「“毒を食らえば皿まで”と言う言葉があるがあ…あれは皿も食べ…れば大丈夫のい…みじゃ…」

明久「まずい思考回路がやられている。」

姫路「吉井くん」

姫路が飲み物を持って帰ってきた。

明久「姫路さん」

姫路「飲み物を取ってきました。あら？みなさんどうかなさいました？」

姫路が倒れてる四人を疑問に思った。

明久「い、いや…皆お腹いっぱいです少し寝て…」

姫路「そうですか。食べてすぐに寝ると牛になっちゃいますよ」

明久（命あるなら牛になった方がいいかも）

明久はなんとか誤魔化したけど今度は坂本が起きた。

坂本「あ…明久」

明久「雄二！」

姫路「坂本君」

坂本「ひ姫路、悪いが俺にも飲み…物をう…ウーロン茶を買って来てくれないか」

姫路「はい、いいですよ。」

そう言っただけ姫路はウーロン茶を買いに行った。

坂本「明久…お前にいいこと教えてやる。よく聞け、古来よりスパイスが毒消しに使われたものが多数存在する。冷蔵庫の無い時代にはその高い殺菌力で食料の保存に役立てている。そして女の子の手料理には、愛情こそ最高のスパイスと言われている。」

明久「それは…まさか…」

坂本「そうだ…明久、愛情と言うスパイスで毒を消すんだ。がは…」

とその言葉を残し坂本は倒れた。

明久はその言葉を聞き決心がつき

明久「わかったよ。雄二たとえばどんな毒物でも!!」

明久は弁当を食らいつき
明久は生死をさまよい始めたのであった。

好きな食べ物でも毎日食べてると飽きてしまう（後書き）

剛史「明けてましておめでとうございます。」

匠「明けてましておめでとうございます。」

俺が新キャラの匠だ！登場はちょっと先だがその時によろしく！」

剛史「そして前書きで書いたように『バカと武器と召喚獣』をよろしくな！」

弁当は冷凍より手料理が一番（前書き）

s i d eをつけてみました。

どうでしょうか？

弁当は冷凍より手料理が一番

前回の続き

午後二時 廊下

剛史 side

俺は、口直しに食堂に向かっていた。

剛史「あゝ酷い目にあった。まさかあんな殺人料理だとは思わかった。完全にトラウマになっちゃった…」

そんなこと言いながら廊下を歩いていると誰かが猛ダッシュで走ってきた。

美春「お姉さまー！！！！！！」

と叫びながら横を通過したが、なぜか止まった。

美春「その豚野郎！！！」

剛史「え？ん？…ん？ん？」

俺はあたりを見渡しても誰もいない俺に指をさすと

美春「そう、その豚野郎、週末はよくもお姉さまに手をかけてくれましたね！」

剛史「はあ？何のこと？第一俺は豚じゃ…」

美春「問答無用です！」

と襲いかかってきた。

俺は身を守るために袖からダガーを出し身を守った。
今、鏢迫り合い状態になっている。

剛史「いいかよく聞け、俺は手をかけていないし、豚でもない」

美春「言っただけです。問答無用と！」

剛史「はあ…：メンドクせえ…：」

鏢迫り合いをやめて距離を取った。

そしてドリル頭が一気に間合いを詰めた

美春「お姉さまは美春のものですわー！！！！！」

ドリル頭は攻撃したが俺は一步だけ動いてかわし、そのまま俺は

剛史「ごめん」

と言いチョップで首をやりそのままドリル頭は、気絶させた。

そのまま食堂に向かった。

食堂に付き売店でBランチを買い食べてる。

剛史「全く酷いよな…：ものすごく勘違いされて…：グチグチ」

俺は一人で食べながらずーと愚痴を叩いていた。

食べ終わって屋上で昼寝をしたが夕方になってしまってたため帰ろう
とすると美波が弁当をやけ食いをしていた。

剛史「あれ？美波じゃんどうしたんだ。」

美波「つ剛史！べ別に何でもないわよ！」

と美波は慌てて弁当を隠した

剛史「それ本当は明久に食べさせるつもりだったんだろ？」

美波「違うってこれはお弁当の余りで作ったて言ったでしょ！」

剛史「んじゃ、何でやけ食いしていたんだ？」

美波「それは、いろんな事があってお昼がまだだったの！！」

またも美波が無理やり誤魔化した

剛史「あっそ、俺もう帰るから」

美波「え！？そうなのそれじゃ」

剛史「んじゃ」

俺はちよつと歩いて美波の方を見ると悲しい目をしていた。

剛史（悲しい目だな……………そうだ！）

俺は思いつき走って行った。

明久 side

明久（あゝ酷い目にあった。久保君と一緒に食堂と行ったのはいいけど、福原先生のビンを蓋を召喚獣で空けてそのあとに足を滑らせて点数が0になって補習させられるとは…お腹すいたなく早く家に帰って1／143のカップ麺でも食べよ。）

と思いつつ鞆を持って帰ろうとするが…

剛史「明久！」

明久「あれ？剛史どうしたの？」

剛史が僕のところに来た。

剛史「ちょっと来てくれ」

明久「え！？ちょ…」

剛史は僕の腕を引っ張りどこかに連れていかれた。

剛史 side

俺は美波の近くまで明久を連れてきた。

明久「なんだよ剛史？僕は1／143のカップ麺を早く帰って食べたいんだよ。」

剛史「はあ？1／143？……1／128だ！そんなことはどうでもいい！あれを見ろ。」

明久「？」

美波が弁当を捨てようとしているそれを見た明久は

明久「あーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！
！ちよつとまった！ーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

と明久は猛ダッシュで美波のもとに走って行った。

剛史「後は問題ないだろう」

明久たちが上手い感じになっていき俺は、そのまま帰って行った

新しい人が来る時は、事前に品物を用意しておこう！（前書き）

匠が参戦

匠「ちょっと待った！何で戦わなきゃならないんだよ！」

剛史「相変わらず元気な奴だな」

匠「だいたい作者！参戦じゃなくて登場だ！」

そんなの気にしていたらスタミナ切れるぞ

匠「いや気にするよ！」

元気な奴をよろしく頼むぜ！

匠「ダメだこりゃ…とにかく俺、匠はこれからよろしくな！！」

新しい人が来る時は、事前に品物を用意しておこう！

平日の文月学園

NoSide

明久たちはムツツリーニが持ってきた。情報で盛り上がっていた。

明久「それ本当！？ムツツリーニ！」

ムツツリーニ「…確かな情報」

美波「へえーそうなんだ楽しみ」

坂本「だが、Fクラスに入るとは限らない、例え入ったとしてもバカだぞ。」

姫路「良いじゃないですかお友達になれるなら」

この話聞いてわかると思うが転校生の話をしていた。ムツツリーニが、情報を入手しみんなに話していた。

だがここで秀吉があることにきずく

秀吉「それは良いのじゃが、剛史はどうしたのじゃ？さっきから姿が見えんのじゃが」

そう剛史は今日学校に来てないのだ。

明久「剛史なら今日は休むって言ってた」

姫路「どうして何ですか？明久くん」

明久「よく解らないけど何か忙しいって言ったよ。」

坂本「忙しい？」

秀吉「何じゃ忙しいと言うのは？」

みんなは剛史の「忙しい」と言う言葉に疑問を抱いていた。

剛史 side

ところ変わって俺は家にいた。

今日は家で片付けていた。俺の家は一軒家で二階建てで家賃は10万円だ。（仕送りは20万円）

俺にとっちゃ大きいすぎる家で3個の空き部屋がある。

匠とあと二人が、この家に来るとなってしまうた。（匠の無理やりどうやったかわからないが…）

二人はまだ夏前に来ると行っていた。そして匠は今日来るのだが遅い…

剛史（遅いな…それにしてもアイツどうやって説得したんだ？）

俺はそう思いつつ2時間くらい待った。

そしてインターホンが鳴りやると来たと確信した。

ドアの近くまで行き開けると匠がいた。

匠「よー！剛史！」

剛史「よっ匠」

やっぱり匠がいた。

匠「始めてきたけど剛史の家はホントに広いな」

剛史「全くだ。たまにお化けが出そうでひやひやする時がある」

匠「何だそれ面白いな」

匠は笑いながらリビングに行きソファーに座りいろんなことを話す。

匠「それはそうと文月学園って成績によってクラスが決まるなんてやばくない？」

剛史「あー…それか…酷いもんだぜ」

匠「何が？」

剛史「それがな成績がよければ、とてもいい設備が用意されて、逆にそうでなければオンボロ設備行きだ。」

俺はそう言うと匠はちよつと驚いたが、そのあとに少し笑った。

匠「大丈夫！大丈夫！俺なら上位クラス確定だ！そーいやお前はどこのクラスだ？」

上機嫌の匠に俺は答える。

剛史「上位Aから下位Fまでであるが俺はその下位のFだ。」

剛史「あゝ疲れた」

匠「お前はまだ力があるからいいじゃないか！俺なんかもっと疲れたし…」

剛史「それだけ元氣をある奴はな、疲れたとは言わないぞ」

匠「うるせえー！」

とまだまだ元氣がある匠
しかし俺はちょっと聞きたいことがある

剛史「んでお前はどいうするの？」

匠「何が？」

剛史「クラスだよ。どこにするんだよ」

匠「んゝ…お前と同じクラスでいいや」

剛史「俺のクラスでいいのか？」

匠「いいんじゃない？」

剛史「本当に俺のクラスでいいんだな」

匠「いいんじゃない？」

とあいまいな答えが返ってくるだけであった。

剛史「あっそ（どうなっても知らないぜ）夕食にしないか？」

匠「賛成！」

匠はまだまだ元気があった

匠「あっそうだ！思い出した！」

剛史「どうした？」

急に匠がリビングを出て行き、数秒で戻ってきた手には発泡スチロールを持っていた。

中を開けるとカニが丸々入っていた。俺はこれを見てテンションが上がるしかない、なぜなら俺の大好物だからだ。

剛史「今日はカニ鍋だ！！！」

匠「あほだ」

俺はそんな匠が言った一言を気にせず。カニ鍋をしておおいに盛り上がり食い終わり片付けていると匠が、急にこんなことを言い出した。

匠「そう言えば、システムってどんなん？」

剛史「行っただけの楽しみにしとけ」

匠「お前はいつも勿体ぶるな」

剛史「気にするな、俺は寝る」

匠「あっそお休み」

剛史「んじゃ」

俺は風呂に入り自分の部屋に行き寝た。

新しい人が来る時は、事前に品物を用意しておこう！（後書き）

匠のキャラ設定は明日までにやります。

キャラ紹介

名前…あぶみ しょう 鑑 匠

身長体重…159cm 43?

性格…元気があり、たまにことわざを言う

体格…特にない

髪…色は茶色、前髪で右目が隠れている。

特技…なべ料理、歌(自覚なし)、走る

不特技…釣り、がまん

教科…得意教科(475点位)

英語、国語、古典

不得意教科(200点以下)

保健体育、日本史、世界史

他の教科は、250〜430点位

好きなもの…乗り物(ジャンルは問わず)、こたつとミカン、サバ
イバル

嫌いなもの…寒さ、冷たいもの(飲み物は除く)、キノコ
召喚獣…ちよつとメカメカしい 姿をしている。

能力…

戦闘機(ミサイルとバルカンが付いている)

戦車(砲撃は二個付いている)

スポーツカー(屋根にバルカンが付いている)

エクспレス(顔にバルカン、屋根に砲撃が付いている)

人型(剣を持っている)

五つに変形ができる。

腕輪の能力…

人型のみ仕様可能100点消費

人型は、通常剣のみだが、100点消費することで、戦闘機、戦車、スポーツカー、エキスプレスのどれかを人型に能力追加として加えられる。

キャラ紹介（後書き）

匠「これが俺のプロフィールだ!!」

剛史「お前らしいな」

匠「そうだろ!! と言うわけでよろしく!!」

乗り物や武器を一言で言ってもいろんな種類がある。(前書き)

匠の初登校

明久たちとなじむことができるのか？

乗り物や武器を一言で言ってもいろんな種類がある。

匠の試験が終わり

次の日の平日

朝のHR前

N o s i d e

剛史「ふぁー~~~~」

ムツツリーニ「…眠たそうだな」

ムツツリーニが剛史に話しかけてきた。

剛史「よっ土屋おはよう」

ムツツリーニ「…おはよう」

剛史「土屋…お前いつもカメラを持っているな、何でだ？」

ムツツリーニ「…営業」

剛史「ふーん…あっ！そうだお前に頼みがある。」

ムツツリーニ「…なんだ？」

剛史「実はこの学校ことがよくわからなくてな試験やイベントなどの日程表をくれないか？」

ムツツリーニ「…わかった。」

剛史「頼む」

話が終わりチャイムが鳴ると鉄人が来てHRが始まった。
そして鉄人は、剛史が知っていることを話す。

鉄人「今日は皆に転校生を紹介する。」

FクラスW「質問、性別はどっちですか？」

鉄人「男だ。」

FクラスW「何だ男かよ。」

FクラスF「つまんねえ」

FクラスA「期待した意味ねえ」

Fクラスのみんなが文句をグタグタ言い出した。

鉄人「静かにせんか！！とにかく来てもらうぞ！おい入ってこい」

鉄人が言うのと匠が入ってきた。

匠「俺の名前はあぶみ鑑しょう匠だ。これからよろしくな」

鉄人「紹介が終わったところで好きな席に座ってもらおう。」

匠「はい」

真ん中の前の席に着いた。

そして昼休みの屋上で剛史は匠を連れてみんなに紹介した。

剛史「おっ！そろっているな」

明久「どうしたの？」

明久が食べながら言う

秀吉「隣におるのは転校生かのう？」

剛史「そうだ、みんなに紹介するよ」

匠「今朝も紹介したが俺の名は鎧 匠だ。よろしくな」

明久「吉井明久だよ。」

坂本「坂本雄二だ。俺の事は坂本でも代表でも何でも構わない」

秀吉「木下秀吉じゃ」

美波「島田美波よ」

姫路「姫路瑞希です。」

ムッツリーニ「…土屋康太」

みんな自己紹介が終わり剛史と匠も昼飯を食べだした。

匠「モグモグ：それにしても十人十色だな」

剛史「お前もだろ」

匠「はははははははは（笑）」

明久「それでも、匠君ってどうしてFクラス何かに」

匠「呼び捨てでいいよ。Fクラスなった理由かあ……名前の書き忘れにしよう」

とまた匠があいまいな答えを出した。

美波は疑問に思い匠に聞く。

美波「匠君だっけ？「しとこう」ってどう言うこと？」

匠「呼び捨てで良いて、あと質問の答えはどのクラスにも知り合いないからFクラスには剛史がいるからそこわけ」

美波「ふーん、そうなんだ」

匠「んで、ここのシステムっていったいどういうの？」

匠はシステムことは聞いているが詳しい話は聞いてないのだ。

秀吉「それは、試験召喚システムって言うにじゃ」

匠「試験召喚システム？」

秀吉「そうじゃ、このシステムは点数に応じて戦うことじゃ。」

匠「へえーそうなんだ！」

雄二「それに自分が操作する召喚獣は、機械が勝手に自分の特性に合わせるからな」

土屋「…というより似た者同士」

剛史「俺に見たいに武器ばっかの召喚獣だったし。」

匠「へえー俺の召喚獣はどんなのだろ」

説明をすればするほど匠はヒーローに憧れる子供みたいだそれを見ていたに姫路が…

姫路「くすくす…匠君、まるで子供ですね」

匠「えっ？そう？そうかな？あと匠でいいよ」

匠は姫路にちょっとからかわれたみたいだ
そしてことしているうちに匠は完全にみんなと友達になったみたいだ。

匠はこんなことを口に出した。

匠「それにしてもFクラスには女子は三人しかいないのか？」

秀吉「お主一つ聞かすがその三人は、姫路と島田と誰じゃ？」

匠「えっ？木下だよ。」

秀吉「ワシは男じゃ！」

[illegible]

秀吉「本当じゃ」

明久「違うよ秀吉は列記とした女の子だよ。」

秀吉「明久よ勘違いなことを言うではない！」

明久「本当の事だよ。秀吉はお人よしでスタイルいいじゃないか、それに比べて美波は胸はないし、性格は男っぽい女と言うより両足が変な方向に曲が、うがー！ー！ー！ー！！！！！！！！」

美波「黙って聞いていればあ……！！！！」

明久が余計なこと言ってしまったからまたプロレス技をかけられムツリーニはまたカメラを持って覗こうとしている

匠「なあ剛史いつもこんなのか？」

剛史 「ん：まあ：そうなのかな？」

剛史もこの光景に少し疑問を抱いていた。

放課後

匠
s
i
d
e

俺は、剛史に頼んで学校を案内してもらった。
だいたい案内が終わり二年の教室を歩いているともものすごい疑問を
抱いている。

匠「なあ剛史、各教室の広さや設備が全然違うな」

剛史「それが前に言った。成績によって決まることだ。」

匠「ふーん、働く者食うべからずか」

剛史「んまそう言うことだ。」

話していると先生らしき人がが歩いてきた。

福原先生「あれ武久君じゃないですか隣にいるのは転校生ですか？」

剛史「そうです。あっそうだ！福原先生召喚許可をお願いします。」

福原先生「ですがね…」

剛史「お願いします。こいつに召喚バトルを教えたいんです。」

福原先生「…仕方ありませんね今回だけですよ。」

言いながらフィールド展開してくれた。それにしてもすごいなあ…

剛史「匠！俺が今から言うことを言えば召喚獣が出てくる。いくぞ
サモン！試験召喚獣！」

と剛史が言うと剛史に似たキャラクターが出てきた。

匠「へえーこれが召喚獣かぁーかわいいなあ」

剛史「わかったか？」

匠「うん、よし行くぜ！試験^{サモン}召喚獣！」

俺が言うのと召喚獣が出てきたが：

匠「あれ？」

俺の召喚獣が確かに出てきたが剣を持ったロボットが表れた。

匠「なんで？なんで俺だけロボットなんだ？」

剛史は、確かに剛史の召喚獣は人だが：けど、なんで俺だけロボット何だ？

剛史「うーん？お前の趣味に影響が出たんじゃないか？」

匠「影響かぁ：一心同体だな。」

剛史「んまあ、いいとして：よし操作してみろ。ちよっと思えばいいだけだ。」

匠「思えばか」

すると俺の召喚獣が動いた。前に歩き始めた。
だが、俺は少し考えていた。俺の趣味の影響が生んだ召喚獣を

匠（俺の召喚獣は俺の影響で生まれたつまり乗り物が好きだから…
…乗り物？……………そうか！）

匠「もしかしたら、なぜ俺の召喚獣がロボットなのか、わかったぜ」

剛史「？」

剛史はまだ築かないみたいだ。

匠「これは悪魔で俺の勘だがな行ぐぜ、a i r p l a n e！」

俺はそう叫ぶと召喚獣は人型から戦闘機となった。

剛史「おっ！すっげー！！」

やはり剛史は驚いている。

匠「やっぱり、お前が言った一言がヒントをくれたんだ。こいつは
ホントに一心同体だな。」

俺はテンションが上がった。

匠「よっしゃ！！！！いくぜ！！！！！！」

剛史「おいおい…弓！剣！」

俺と剛史の戦いが始まると思ったけど…
フィールドが無くなった。

匠・剛史「あれ？」

福原先生「そろそろ時間なんで、早く帰るように」

匠・剛史「ええーーーーー!!!!!!」

そんなの言葉を聞く耳持たず、どこかへ行ってしまった。
俺達は、お互い顔見てため息を吐いた。

乗り物や武器を一言で言ってもいろんな種類がある。（後書き）

匠「あゝあ折角のバトル出来るかと思ったのに」

剛史「全くだ。面白くない」

匠「でも剛史と武器の相性は魚心あれば水心だな。」

剛史「なんだそれ？」

匠「魚に水と親しむ心があれば、水もそれに応じる心を持つという意味だ。」

剛史「ほー言いことわざじゃないか」

旅行前の晩は眠れないのは子供だけじゃない

文月学園の廊下

n o s i d e

人通りの少ない廊下で、ムツツリーニと匠が何かしていた。

ムツツリーニ「…合言葉は？」

匠「性欲を持て余す」

ムツツリーニ「…良し」

匠「例の物は？」

ムツツリーニ「…現金と引きかえ」

匠「良し」

ムツツリーニは匠に“例の物”を渡した。匠は、それをあけて中身を確認する。

匠「うわぁ…win350だ…」

ムツツリーニ「…あんまりやりたくなかったが」

匠「感謝しているよムッツ、これ」

匠は現金と交換し喜んでいた。

剛史「お前らそこで何しているんだ？」

そこに剛史が来た。

匠「剛史どうしたんだ？ お前もムッツに何か頼んだのか？」

剛史「まあな、例の物は？」

ムッツリーニ「…バッチリ」

ムッツリーニは、剛史に物を渡す

匠「それは何だ？」

剛史「学校行事やテストの日程表だよ。あんがとうな土屋」

土屋「…これ位朝飯前」

剛史「んじゃ、俺は教室に戻るわそろそろチャイム鳴るし」

匠「俺も戻るわ」

ムッツリーニ「…俺も戻る」

剛史とムッツリーニと匠は教室に戻り、剛史は学校行事の紙を見て
いると…

剛史（清涼祭？なんだこれ？学園祭かなあ？）

剛史は疑問に思い秀吉に聞きに行った。

剛史「秀吉、清涼祭って何？学園祭みたいなもんか？」

秀吉「ん？まあそんなもんかの」

剛史「へえー…」

秀吉「剛史は、清涼祭には知らんのか？」

剛史「んまあ…三学期に転校したからなあ…」

そこでチャイムが鳴り鉄人が来た

鉄人「授業だ席に着け」

剛史「んじゃ、あんがとうな」

秀吉「お安いご用じゃ」

剛史は席に座り授業を受けた。

放課後

明久と坂本と匠は教室で話し合っていた。

明久「雄二！早く試召戦争をやろう、設備を落とされた上に鉄人の補習で死んじやうよ」

匠「そうだよ！俺だって試召戦争をやりたいよ！」

坂本「それは無理だ。試召戦争で負けたクラスは、こっちの宣戦布告は三カ月は無理だ。」

明久「そんなあゝ…」

坂本「まっ三か月なんてあっという間だ。それに匠戦いたいんなら清涼祭がある。」

匠「まじで！？やったー！！！」

坂本「それに俺達は勝たなきゃいけないからな」

明久「それはどうして？」

坂本「それは今度話す。んじゃ俺は帰るわ」

匠「じゃ」

と雄二は帰った。

明久「僕たちも帰ろっか」

匠「そうだね」

明久と匠も教室を出て行った

旅行前の晩は眠れないのは子供だけじゃない（後書き）

次回から清涼祭がスタートです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0258z/>

バカと武器と召喚獣

2012年1月13日01時50分発行